
左道の末

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

左道の末

【Nコード】

N9601M

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

織田信長は蟲毒を使う者に命を狙われる。だが彼はそれに動じない。そして術を使うの方が。人を呪わば穴二つというお話です。

第一章

左道の末

この時織田信長は彼にとっては実に奇妙な話を聞いていた。話しているのは千利休である。彼が茶室において茶を淹れるながら話をしてきたのである。

その話を聞いてだ。信長はまず言った。

「面妖な話じゃな」

「そう思われますか」

「思わないと言えば嘘になる」

こう利休に返す。丁度彼が茶を淹れているそれを見ながら言ったのだ。

「それはのう」

「しかし実際にそれを行う者がおります」

「蟲毒をか」

「はい」

一言で確かに答えた利休であった。茶室の中には二人しかいない。質素で入り口の小さいその部屋の中に二人でいる。こうした話にはもってこいの場所ではあった。

「それをです」

「してその蟲毒じゃが」

彼はそれについても問うた。

「どの様にしてはじめるのじゃ？」

「まずは様々な生き物を集めます」

利休はそれについても話した。

「そしてそれを一つの箱に入れるのです」

「生き物をか」

「蛇なり蛙なり虫なり入れるものは様々です」

それは雑多だというのだ。

「集められるだけ毒を持ったものや禍々しいものを集めます」

「そして箱に入れてか」

「後は待つのです」

「待つというのか」

「はい、生き物達は中で互いに争います」

そうなるというのである。

「そして最後に生き残るのは一匹だけです」

「その最後の一匹が問題なのじゃな」

「左様です。おわかりですか」

「話を聞いていればわかる」

信長は静かに答えた。勘の鋭い彼らしかった。

「その凄まじい争いを生き残った一匹はさぞかし強い呪いを持って
いるのじゃろうな」

「それを使うのです。そういうことです」

「やはりな。それが蟲毒というものか」

「そしてです」

利休はここで話の本題に入ってきた。

「今その術を使う者がこの岐阜に潜り込んでおります」

「武田か？それとも朝倉か？」

すぐにこうした相手の名前を出してきた信長だった。

「どちらじゃ？」

「そこまではわかりませぬが」

「そうか。わしの命を狙ってきておるか」

「どうされますか？」

「捨て置け」

信長は静かにこう言うだけであった。

「わしの周りに結界でも何でも張っておればそれでよい」

「術を使う者には何もせぬのですか」

「そうじゃ。その者は捨て置け」

信長の言葉も考えも変わらなかった。

「よいな、それは」

「それはまたどうして」

利休はいぶかしむ顔で信長に問うた。主の苛烈な性格を知っているからこそ今の消極的な様子はいぶかしむに値するものであった。

しかもであった。信長はさらに言うのであった。

「して、じゃ」

「して、ですか」

「そうじゃ。これからのことじゃが」

話を変えてきたのだ。何とでもないようにだ。

「その朝倉じゃが」

「朝倉ですか」

「浅井と誼を通じ続けておるな」

政治の話であった。それを利休に問うたのだ。

「姉川で敗れて久しいが」

「はい、それは間違いありません」

利休は内心信長が自分の命を狙うその術師について殆ど関心を払わないのにいぶかしみながらもだ。それでも話を合わせたのだった。

「それについてはです」

「わかった。それではじゃ」

「どうされますか？朝倉は」

「そろそろ兵を進める」

そうするというのだ。

第二章

「武田も信玄入道が死んだ」

「武田は今も隠していますが」

「それでもじゃわかるものはわかるからな」

「その通りです。では」

「武田は今暫く動けぬ」

信玄の喪に服すからだ。その間というのだ。

「では我等はじゃ」

「その間に攻めると」

「朝倉を滅ぼせば浅井も考えを変えよう」

信長は浅井についてはいささか思うところがあつた。主である長政が妹お市の夫であるからだ。だから浅井は今も攻めなかつた。

そしてであつた。信長は今兵を出した。その出陣の時だ。

不意に一羽の烏が彼に向かって来た。そのうえで嘴を繰り出そうとする。しかしであつた。

その烏はあえなく消え去ってしまった。すぐにであつた。

「むっ！？ 烏が消えた」

「これは面妖な」

「驚くことはない」

その烏を見て驚く家臣達に何でもないといった顔で返す信長だつた。

「別にじゃ」

「しかし今のは明らかに尋常なものではありませんせぬ」

「烏が襲い掛かりそして消えるなぞとは」

「これは明らかに」

「左道じゃな」

信長は彼等に造作もなく答えた。

「間違ひなく」

「では何故その様に落ち着かれていますのですか？」

「これは明らかに殿を」

「それでもなのですか」

「捨て置け」

彼等にもこう言うのだった。

「よい。捨て置くのじゃ」

「しかしそれでは」

「またこうして来ます」

「それでもなのですか」

「見ておればよい」

それだけでいいというのだ。

「やがてわかることじゃ」

「左様ですか」

「殿がそう言われるのなら我等は構いませんが」

「ですが」

「誰もこのことで動くでない」

信長は言いながら家臣達を見回した。その目の奥にあるものを見ていたのだ。見たところ彼等の目の奥に怪しいものはなかった。左道の者を使っている者が中にはいないことをそれで察したのであった。

それを見届けてからだ。信長はまた言った。

「よいな。動けばかえって罰する」

「では我等はこのまま」

「見させてもらいます」

「殿が仰る通り」

「越前に入るまでに全てはわかる」

信長は何でもないといった調子で告げた。

「それまでにじゃ。では進めるぞ」

「はい、それでは」

「今より」

こうしてであった。信長は馬に乗りそのままその家臣達を率いて越前に向かう。そしてそのうえで、であった。

近江に入ったところだ。今は仮寝の宿にしている寺の一室で寝ている信長の枕元に蛇が近付いて来た。枕元を守る小姓達はそれにぎよつとしたがであった。

蛇は鎌首を掲げて彼を襲おうとした。そして首を伸ばしたがそれでもであった。信長の顔を噛もうとしたところで消え去ってしまったのだった。

「何と」

「またしても」

「また来たな」

信長は目を覚ました。そのうえで静かに言ったのである。彼は寝たままだ。目だけ開けている。

「思ったより早いもう」

「また左道ですか」

「夜に」

「左道は闇の術」

信長は夜という言葉に対して述べた。

「夜に来るのも道理じゃ」

「まさに魔道ですか」

「だとすると」

「左様、魔道じゃ」

信長はまさしくそれだというのであった。

第三章

「して魔道を使えばじゃ」

「どうなるというのですか？」

「それは」

「先にも言ったな。もうすぐわかることじゃ」

またこう言ってみせた信長であった。

「それだけじゃ。今は」

「では今は」

「我等は」

「見ておくのじゃ。よいな」

「はい、では」

「そうさせてもらいます」

「また寝る」

信長の今度の言葉は造作もないものであった。

「よいな」

「はい、それでは」

「お休みなさいませ」

「次だな」

信長は寝る前に静かに話した。

「次で終わる」

「次で、ですか」

「といいますと」

「それもおいおいわかる」

信長は至って穏やかな顔であった。次第に眠りに戻っていつてい
るのもわかる顔であった。

「それではな」

「畏まりました」

小姓達にとっては信長はまさに絶対者である。実際に彼は口応え

なぞしようものなら即座に手打ちをするような人間である。何も言える筈がなかった。

そのまま眠る信長であった。その次の日。近江をさらに進み休憩で簡単な陣を敷きそこで家臣達とこれからのことを話し合っている。とどった。ここで。

「むっ!？」

「何故狼がここに」

「まさか」

「そうであらうな」

何と陣中に狼が出て来た。その黒い不気味な狼を見て驚く家臣達に対して信長は冷静に言うのだった。

「兵達が守りを固めているのにここまで大きな狼が入られる筈がない」

「それではやはり」

「殿、お下がり下さい」

「ここは我等が」

家臣達は一斉に立ち上がりその刀に手をかけた。そのうえで彼の前を固めようとする。だが信長はここでその彼等に告げるのだった。

「よい」

「よいとは!？」

「まさかここで」

「わしに向かわせるのだ」

そうしろというのである。

「よいな」

「それではここは」

「そうされるのですか」

「見ておるのだ。よくな」

信長は己の上座から動こうとはしない。椅子に座ったままである。ただその狼を凝視したままだ。やはり動こうとはしないのであった。そうしてだ。その姿勢で狼を己の前に進ませた。狼は禍々しい赤

い目で彼を見据えながら来た。そうしてそのうえで彼に襲い掛かって来たのだった。

だが彼の手前で消えた。烏や蛇と同じであった。

「消えた!？」

「また」

「結界ですか」

「左様、それじゃ」

まさにその結界によってだというのだ。

「また守られたのじゃ。そして」

「そして？」

「もうじゃな」

また言う彼だった。

「もうわかってくることがある」

「といいますと」

「それは」

「越前に入る頃に早馬が届く」

信長は何でもないといった口調で話し続ける。

「さて、ではまた兵を進めるぞ」

「はい、それでは」

「これよりまた」

家臣達も頷く。まずは浅井勢の籠る小谷城を完全に取り囲んだうえで信長が自ら先陣となり越前に攻め入る。その時に彼が言った早馬が来た。

第四章

そしてだ。その早馬は今まさに越前に入ろうという信長の前に片膝をつきだ。こう述べたのであった。

「岐阜の街中で一人の年寄りが死んでおりました」

「年寄りじゃったか」

「朝倉の忍の者でした」

それだったというのである。

「名前はあやかしの元太」

「それがその忍の名前じゃな」

「左道の使い手です」

「ふむ、やはりな」

信長はその言葉を聞いて納得した顔で頷いた。

「そうじゃったか」

「やはり左道でしたか」

「その者が殿の命を」

「どの手の者かはわからなかったがな」

それはわからなかったと。周りにいる家臣達には話した。

「しかしじゃ。左道の者だったのは確かじゃ」

「はい、それは」

「確かに」

家臣達もそれには頷く。

「しかしです」

「殿、宜しいでしょうか」

「お伺いしたいものがあります」

家臣達はここだ。誰もが怪訝な顔になりそのうえで信長に対して問うのであった。

「何故おわかりになられたのですか？」

「左道の者が死んだと」

「それはどうしてでしょうか」

「魔道だからじゃ」

信長の最初の返答はこれだった。

「魔道だからそうだったのじゃ」

「左道は魔道」

「だからですか」

「そうじゃ。魔道はただその相手を殺めるだけではない」

それだけではないというのだ。

「やがては己も殺めてしまふのじゃ」

「そうなのですか」

「それは」

「防がればそれだけのものが己に返って来る」

そうなるというのである。左道というものはだ。

「その結果じゃ。それである者は死んだのじゃ」

「そういうことだったのですか」

「それによって」

「これでわかったのう」

あらためて家臣達に告げた。

「何故わしがわかることと言いつけてきたのか」

「はい、それは」

「よく」

「そういうことじゃ。よく言うであらう」

信長は殊更落ち着いた声で話した。あまりにも名高いかん高い声であるが今は極めて落ち着いた響きのあるものになっていた。

「人を呪えばじゃ」

「穴二つ」

「そういうことですな」

「わしが防がずともやがては取り込まれて事切れておった」
そう言ったとも話した。

「結局のところはな」

「魔道故に」

「そうだったと」

「左様じゃ。それではじゃ」

信長はここまでで話を終えた。そのうえでだった。

「行くぞ。越前じゃ」

「はい、それでは」

「今より朝倉を」

「完全に討ち滅ぼす」

そうするということだった。織田にとって朝倉は同じ守護大名に仕えてきた間柄である。だが朝倉の方が家柄は上でその因縁もあり仇敵同士であり続けていたのである。ただ將軍や天下を巡って対立しているだけではなかったのである。

「あの義景めの首を見てやろうぞ」

「はい、それでは」

「今こそ越前に」

家臣達もそれに応えそのうえで越前に入るのだった。早馬は岐阜に戻って行く。後に残ったのは戦だった。左道は何も残ってはいなかった。

左道の末 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9601m/>

左道の末

2010年10月8日13時44分発行